
ニュージーランド盲人協会と盲導犬サービス

Royal New Zealand Foundation for the Blind

川崎 千里

1. はじめに

国土面積は日本やイギリスとほぼ同じ、しかし、人口は日本の30分の1、イギリスの20分の1と、経済大国とは決して言えない国、ニュージーランド。

早いものでこの国の盲導犬サービスに席を置いて既に2年以上となり、その間幸運にも盲導犬と視覚障害者の訓練をする機会が、日本での7年間の3倍以上も与えられた。その経験の中で多くのことを学び、それ以上に日本での仕事の多くの間違いに気づかされ、“あの時これを知っていたら” “あの失敗はこういう理由からだったのだ”と、日本で訓練をした盲導犬と視覚障害者に申し訳ない思いであった。その私と盲導犬の関わりすべての経験から、ニュージーランド盲導犬サービスと視覚障害者福祉を紹介したいと思う。

2. Royal New Zealand Foundation for the Blind

1) RNZFB の事業内容

Royal New Zealand Foundation for the Blind（以下 RNZFB という）はニュージーランド国内唯一の視覚障害者サービス機関である。

視覚障害者数1万200人に対するそのサービスの内容は、盲幼児教育から始まり、盲学校・ソーシャルワーク・点字図書館・コミュニティリビングプログラム（コンピュータ訓練・日常生活動作訓練・点字訓練）・白杖訓練・盲導犬訓練・職業訓練等にまで及んでいる。昨年までは盲老人ホームも運営されており、文字通りゆり籠から墓場までの生涯を通じてのサービス機関であったが、

ニュージーランド国内経済の悪化に伴って閉鎖されてしまった。盲老人ホーム事業は打ち切られてしまったが、視覚障害児誕生あるいは視覚に障害が発生した時点から、本人の希望するすべての学習・訓練が終了するまで単一機関で一貫したサービスが受けられるメリットは今でも変わらない。

第1に、単一機関であるが故に、いつ、どのサービスを選択するかの自由がより豊富にある。異なったサービス間でも連絡が密にとれ、調整しあえるので視覚障害者は同時に複数のサービスを受けやすい。

第2に、各サービスの指導員からクライエントについての詳細な記録が隨時手元に寄せられる。

第3に、指導に入る前の準備訓練を他の指導員やワーカーに依頼できるので、訓練結果を最大限に引き出せる。

第4には、その時の視覚障害者のニーズの変化に応じ、各訓練部門を縮小、あるいは拡大させることで、ニーズに対し、柔軟に迅速に対応できる。以上がそのメリットである。この様な一貫したサービス体制は、日本の立て割り的な福祉から見ればうらやましい限りである。

その他、RNZFB の特徴として、ニュージーランド先住民族であるマオリ民族視覚障害者を対象とした、マオリ民族サービス部門もあり、マオリ語やマオリ文化の伝統と慣習によるサービスが行われている。

2) 都市大規模訓練施設から地方分散小規模訓練施設へ

このように RNZFB では視覚障害者に対するすべてのサービスを一手に行うとともに、ニュージーランド国内各地に16の支部を置いて、全国の視覚障害者が均一のサービスを受けられるようにしている。既に、ソーシャルワーク、白杖訓練、日常生活動作訓練はすべて訪問形式が採られているが、その他の訓練に関しては各支部に配属する指導員を養成中である。また、盲学校の寄宿舎に入寮している生徒や大都市にしかないサービスを受ける遠隔地の視覚障害者の交通費は、すべて RNZFB によって負担されており、サービスの均一化の姿勢がみられる。なお盲学校生徒については、他の障害児と同様にメインストリーム化が進められており、可能な限り子供たちは生活地域の普通学校に進学している。各学校には盲教育専門教師が巡回訪問し、特別科目の教育と普通学校教

師の指導とサポートをしている。

3) RNZFB 各サービス部門による連携指導

盲導犬の使用を希望する中途視覚障害者を例にあげて、RNZFB の各サービス部門によるリハビリテーションプログラムについて紹介する。

第1段階——クライエントに視覚の障害が発生した時点で、医師からサービスアドバイザー（以下SAという）と呼ばれるRNZFBのソーシャルワーカーに患者との接触が要請される。

第2段階——SAによってRNZFBの事業内容がクライエントに紹介される。また、必要に応じてカウンセラーが派遣され、クライエントの心理状態を整える手助けをする。

第3段階——クライエントが盲導犬を希望した場合、SAから盲導犬サービスへクライエントとの接触が要請され、盲導犬歩行指導員が本人を訪問して盲導犬についての説明と面接を行う。このとき多くのケースでは、盲導犬を使用するために、クライエント自身が7ヵ所以上の目的地に行く単独歩行能力を有することと、盲導犬を管理するために自己身辺処理能力を有することの必要性が説明される。クライエントの健康状態、歩行目的、生活環境等を考慮しながら、盲導犬歩行訓練開始までの訓練カリキュラムが立てられる。

第4段階——盲導犬歩行訓練に必要な準備訓練の課題が、彼らの生活地域を担当する歩行指導員、日常生活指導員、SAらに報告され、これらの指導員により、訪問形式で訓練が行われていく。

第5段階——準備訓練終了が生活地域の指導員から盲導犬サービスに報告され、盲導犬歩行訓練が開始される。クライエントの多くは、準備訓練終了後も、より高度な段階までそれぞれの訓練の継続を希望するようである。

第6段階——盲導犬歩行訓練が終了すると、クライエントは盲導犬サービスのフォローアップシステムで盲導犬サービスによるモビリティ一面の質を管理される。また、転居した場合（ニュージーランド人は通常においても、しばしば住居を変更する）、新しい目的地を持ちたい場合等の、オリエンテーション面の必要性においては、地域の地理に精通した地元の歩行指導員の指導が受けられる。地元のRNZFBスタッフはオリエンテーション指導等を通じて、盲導

犬ユニットに接する度に、盲導犬の質が保たれているか、盲導犬が不正に取り扱われていないか等を観察しており、問題が生じている時には速やかに盲導犬サービスに報告され、アフターケア訓練が要請される。

3. ニュージーランド盲導犬サービス

現在、ニュージーランドでは251組の盲導犬ユニット（盲導犬と視覚障害者のペア）が活躍している。ニュージーランド盲導犬サービスは今年20周年を記念したばかりの、比較的歴史の浅い盲導犬協会であるが、コンスタントに盲導犬訓練数を伸ばし、世界盲導犬協会においても高い評価を得ている理由は何か、ニュージーランド盲導犬サービスの歴史と事業内容を紹介するとともに、今ここで特に力を入れている「繁殖部門」と「盲導犬訓練士・盲導犬歩行指導員養成部門」に注目して考察してみたい。

1) ニュージーランド盲導犬サービスの歴史

ニュージーランド盲導犬サービスは、1973年ニュージーランド盲人協会の一部として、2名のインストラクターを英国盲導犬協会から招き、合計4名のスタッフで発足した。これ以前、ニュージーランドの視覚障害者が盲導犬を得るために、RNZFBの援助を受け、遠くオーストラリアやイギリスへ渡航して現地で訓練を受けねばならなかった。

1973年、ニュージーランド初の国産盲導犬が誕生し、1989年までの15年間で106ユニット、年間6～7ユニットが誕生してきた。

1989年、ニュージーランドの視覚障害者の強い要望により盲導犬事業の拡張が始まり、スタッフの増員・訓練施設の拡張がなされている。

現在、ニュージーランド盲導犬サービスはスタッフ数17名で運営されており、既に年間訓練数は45ユニットにまで達成し、訓練待ち期間（視覚障害者が盲導犬を希望してから実際に訓練を受けるまでの期間）は12ヵ月以内と大幅に短縮されている。

2) ニュージーランド盲導犬サービス事業、盲導犬の一生から

(1) 子犬の誕生（0～約7週令）

慎重に選択された繁殖専用の両親から誕生した子犬たちは、繁殖部の専門ス

タッフによって生後7～8週間をその母犬や兄弟犬と共に管理される。

(2) バビーウォーカー期(約7週令～約12月令)

その後約1年間はバビーウォーカー(子犬の飼育をボランティアで行う人)家庭に預けられ、人間の生活に関わる多くのできごとを経験し、専任の指導員によって基礎的な訓練を受けながら育てられる。

(3) 集中訓練期(約12月令～約18月令)

約1歳に成長して子犬時代に大きな問題の無かった犬は、盲導犬サービスに集められる。そして、25項目の気質面での適性検査を受け、盲導犬に適した資質を持った犬だけが訓練士による約4～6ヵ月の本格的な訓練を受ける。

(4) 合同訓練準備期(約18月令)

すべての訓練項目と規定以上の訓練数をこなし、アイマスクを装着した訓練士による最終訓練が終了した時点で、その犬の特性が最高に発揮できる視覚障害者が盲導犬希望者リストの中から選ばれる。盲導犬とユーザーの親近感を作り、合同訓練をスムーズに行うために、盲導犬は合同訓練に先立って視覚障害者の自宅に送られ、ペットとして2～3週間を過ごす。

(5) 合同訓練期(約19月令)

視覚障害者が盲導犬の使用方法・飼育方法を学ぶ期間で3～4週間の訓練が歩行指導員によって行われ、この非生活地域での訓練を受けたユニットには、生活地域での訓練が約1週間、合同訓練終了直後のフォローアップ訓練として行われる。今後はすべての合同訓練をユニットの生活地域で行うよう事業計画が進められている。

(6) 盲導犬期(約20月令～約11歳令)

盲導犬として、視覚障害者の見える杖として実際に働き始めてからも、最初の1年間は3ヵ月毎、2年目からは毎年1回の定期的なフォローアップ訓練が歩行指導員によって盲導犬が引退するまで行われ、多くの盲導犬は8年から10年働くことになる。

(7) 引退後(約11歳令～16歳令)

引退の時期は各盲導犬によって、使用者の年齢、使用目的などの理由から違ってくるが、盲導犬として視覚障害者を安全に誘導できない危険性がみられた場

合、あるいは盲導犬としての仕事がその犬にとって負担であると判断された場合、歩行指導員によりその盲導犬の引退時期が知らされる。多くの盲導犬はその仕事を引退した後も引き続き同視覚障害者の元でペットとして余生を過ごしている。

4. 繁殖部門

1) 新犬種の盲導犬

ニュージーランドでは盲導犬としてさまざまな犬種を使用している。日本では耳慣れない犬種も多いとは思うが、ここに紹介してみる。

日本で主に採用されているラブラドール・レトリーバー、ジャーマン・シェパードはニュージーランドでも多く採用されている。その他、ゴールデン・レトリーバー、コリー、ボクサー、エアデール・テリア、スタンダード・プードル、ジャイアント・シュナウザー、ダルメシアン、ローデシアン・リッジバック、ブービエ、サモエドとこれらの純血種の一代雑種（ラブラドール・レトリーバー×ゴールデン・レトリーバー、ラブラドール・レトリーバー×コリー）等が使用されている。

これらの犬たちはその種によって精神的、肉体的特徴を持っているが、これらの中で特にゴールデン・レトリーバーはゆっくりとした歩行スピードと歩行量の少ない老人用に、スタンダード・プードルは使用者本人、あるいはその家族に“犬の毛アレルギー”がある場合に採用されている。このように新種の盲導犬の導入により、今まで盲導犬の使用には適さないと考えられていた人達にも、盲導犬を使っての単独歩行が可能となった。

その他の多犬種使用の理由として、1989年、新盲導犬サービス設立に先立って、全盲導犬ユーザーに対して行われた意識調査の中で、数多くのユーザーが、“好きな犬種を盲導犬として使用したい”と希望したことがあげられる。我々がペットとして飼う犬を選ぶ場合と全く同様に、視覚障害者にもそれぞれ犬種の好みがある。勿論、盲導犬としての最低限の大きさ、資質は問われるが、その範囲内で“視覚障害者により多くの選択の機会を”という信念に則って多くの犬種が使用されている。

これだけ多くの犬種を採用している所は世界にも稀と言えるだろう。各国の盲導犬協会がこれらの犬種の採用を始めるかどうかはまだ未知の段階である。というのは実際に訓練をしていてもラブラドール・レトリーバーは4カ月で済む訓練が、他の盲導犬としての歴史の浅い種では、訓練士が個々の犬種特性に対する訓練法を獲得していないことと、個々の犬種の学習能力の差によって6カ月、8カ月という長い訓練期間が必要になり、このリスクは年間訓練頭数や訓練士数の少ない盲導犬協会では大きな負担となるからである。

2) 選択繁殖の重要性

人間の場合よく「氏より育ち」と言われるが、犬の場合は経験や教育ではなく、生まれ持った気質に90パーセント支配される。例えば、神経のデリケートさ、攻撃性、臆病さ、興奮度、他犬意識の強さ、音や匂い等の刺激に対する反応をはじめとし、盲導犬として要求される探求心、希求心、学習力等も親から子へと受け継がれていく。

これらの遺伝的性質は、多くの場合成長後も変らず犬を支配しており、訓練によってできることは、その短所を表面的や一時的に押さえるだけであって根本的に問題点を解決することは不可能だと言われている。ここに盲導犬事業での選択繁殖の重要性が出てくる訳だが、“どんな犬でも訓練して見せる”という自らの訓練技術の過信によって、未だに繁殖犬の選択を軽視している盲導犬協会が幾つかあることは残念なことである。

特に盲導犬の訓練で忘れてならないことは、“盲導犬を使用するのは訓練士ではなく、犬の訓練には不慣れな視覚障害者である”と言うことである。

例えば、犬の群れのリーダーとしての気質を受け継いだ犬は、学習力、作業力の点では非常に優れているし、その犬を服従させるだけの非常に強い支配力のある訓練士には優れた僕として働くが、ひとたび相手が変わり、少しでも隙を見せるやいなや、リーダーの地位を奪回し、たちまち暴君として君臨してしまうのである。群れのリーダーとして服従しない相手に攻撃するのは、群れを統率するために必要な当然の振る舞いだからである。だから、盲導犬協会での訓練段階では優秀だった犬が、ユーザーの手に渡ってから、手も付けられない状態になってしまふこともおこりうることである。

このように支配欲の強い犬を盲導犬として使用するには、当然、より支配力の強いユーザーが必要であり、次に、素人が犬を服従させるために、簡単で手っ取り早い方法として、腕力で相手をねじ伏せる方法に頼らざるを得なくなる。この腕力の差の故に、いくつかの盲導犬協会では、男性ユーザーが女性ユーザーよりも優れているとみなされているが、このような腕力による盲導犬のコントロールを強いる方が間違っているのではないだろうか。ユーザーにリーダーの地位を譲り、しかも誘導という主体的な仕事のできる気質の犬を使用すれば、女性だけでなく、高齢者や重複障害者も素晴らしい盲導犬ユーザーとなれるこ^トとを忘れてはならない。

盲導犬の繁殖犬を選ぶ場合、その気質と同様に肉体的な健全さも要求される。ニュージーランド盲導犬サービスでは、その犬自身が完全な健康体であることの他に、遺伝的な疾病である膝関節、腰部の骨格、眼底異常の疾病歴を3代に逆上り調査している。

5. 盲導犬訓練士・盲導犬歩行指導員の養成

1) 養成コースの内容

訓練士候補生として採用された職員は、最初の2ヵ月は犬舎スタッフとして犬舎の清掃、犬の健康管理法、給仕法、基礎的な犬のコントロール法を学習する。次に4頭から6頭の訓練犬が与えられ、有資格の訓練士の指導の下で犬の訓練を約6ヵ月実習する。その後は単独で、定期的な指導とサポートを受けながら訓練実績数を増やしていき、約25回の講義を受講して最低16頭の盲導犬を訓練した後、訓練士資格取得試験を受けることができる。

歩行指導候補生として採用された職員は、盲導犬訓練士、盲導犬歩行指導員、白杖歩行指導員の3つの資格を取得することが義務づけられている。白杖指導員資格取得のためMassey大学リハビリテーション学科では、学習と実習を1年、同大学の同学科を通信教育で履修しながら、盲導犬訓練士と盲導犬歩行指導員の資格取得に3年と計4年間の養成コースとなっている。盲導犬歩行指導員養成コースでは約40回の講義の受講、26組以上の盲導犬ユニットの指導実習が組み込まれている。

2) 講義内容

(1) 訓練士養成部門

①犬をコントロールすることの必要性と各々の環境での利点、②犬の気性と犬の行動心理学、③犬を操作する人の心構えとアプローチ、④基礎服従訓練、⑤盲導犬訓練のカリキュラム、⑥訓練の目的と方法、⑦訓練に用いる用具と機器、⑧訓練する環境と場面、⑨訓練の注意事項について講義される。

(2) 盲導犬歩行指導員養成部門

①盲導犬を使用できる視覚障害者の選考基準、②盲導犬と視覚障害者の組み合わせ方、③合同訓練の目的とカリキュラムの企画、④合同訓練への導入、⑤盲導犬との歩行訓練以前にユーザーが習得すべき技術、⑥盲導犬の操作技術、⑦盲導犬の管理の仕方と必要性、⑧盲導犬との歩行技術、⑨安全を獲得するために、⑩環境と場面、⑪盲導犬ユニットの合同訓練終了認定、⑫フォローアップ訓練とアフターケア訓練、⑬指導の注意事項について講義される。

3) 指導手引き書の有効性

ニュージーランドでは盲導犬と盲導犬ユニットに対する訓練に必要な知識と技術はすべてマニュアル化されており、盲導犬訓練士・盲導犬歩行指導員養成コースの講義で使用されている。これらの訓練・指導の手引き書が有ることの大きな利点は以下のようである。

第1にすべての訓練士・指導員の用語の認識が一定しているため、学習会、訓練報告、会議などがスムーズに運営できる。他の指導員の訓練経験を自分の知識とできる。指導員間での意見交換の容易さが、指導上での問題の解決案を見つけやすくしている。

第2にすべての指導技術にその目的、注意事項も明記されているので、新しい技術を導入する際、その技術が極端に走るのを防ぐことができる。

第3に、指導員の知識、技術がハッキリと印刷物として存在しているので、古い情報と新しい情報との差が明確に意識でき、隨時、アップデートの情報を取り入れるという姿勢を促し、指導員が知らず知らずのうちに古典的な指導法や理念に縛られてしまうことを防ぎ、指導がより科学的になる。

第4に、実習は別としても、講習会等によって一度に多数の学生に知識の普

及ができる。指導員養成がより組織的にできる。

4) 指導手引き書を使用しないことの問題点

一般には、知識、技術等の情報を文書化することは当然のこととみなされているだろう。

盲導犬事業では、この当然の「情報の文書化」が長い間見過ごされてきており、多くの盲導犬協会では、盲導犬の訓練、ユニットの歩行訓練をベテラン指導員の勘と経験のみに任せ、指導員養成を師匠から弟子への個人的な技術伝達法に頼っている。そのため、先に述べたような利点が、逆に盲導犬協会事業では事業運営における致命的な弱点となっている。それらの問題点を以下に挙げてみる。

- ①訓練士・歩行指導員の養成が困難で、慢性的な人手不足を生じている。
- ②ベテラン指導員のように勘や経験に頼ることも出来ない新指導員は、指導法を理論的に学んだ新指導員に比べ非常に未熟である。
- ③用語の認識に統一性がないために、指導上での問題の解決策が他の指導員との意見交換によって見つけることが困難である。
- ④他の指導員、他の施設の経験を学び、より高度な技術に結び付けることが難しい。

⑤新技術、情報から取り残される。

⑥視覚障害者が指導員各々によって大きく異なる指導法に混乱してしまう。

これらの問題は多くの盲導犬歩行指導員各個人の努力と向上心にも関わらず発生し、盲導犬事業における致命的な弱点になっていると思われる。

盲導犬事業が伸びている国は、必ず系統立った科学的な手引き書を使用しており、今までも白杖歩行指導員との比較で言っていたことだが、同じ盲導犬指導員間で、手引き書を使用した教育を受けたか否かの比較によってその質の差がより明確に示されている。この事実によってすべての盲導犬事業における、早急な手引き書の作成が急務であろうと思われる。

6. おわりに

国際盲導犬連盟の訪問調査で、“最も優れた盲導犬協会”の一つに選ばれた

ニュージーランド盲導犬サービスを、その事業内容と盲導犬訓練に対する基本的な考え方を中心に、盲導犬に対する知識の少ない人にも RNZFB の特徴が理解して頂けるように、国際盲導犬連盟からの報告と、各国指導員からの報告された盲導犬協会を例に上げながら紹介した。

整った環境で訓練だけに専念できるニュージーランドの盲導犬歩行指導員は、多くの問題の中で働き、複数の部門での総合的な指導能力を要求される日本の歩行指導員と比較し、随分と恵まれた環境で働いていると言えるだろう。特に未だに盲導犬が珍しがられ、その普及と啓発活動に多くの時間を割かれる日本社会に於いて、多くの障害の中で働く盲導犬関係者の情熱と努力には頭が下がる思いである。ただ一つニュージーランドにおいて日本の盲導犬協会に対し思うことは、小規模盲導犬協会が独立散在していることの危険性と、それぞれの小さな協会が一つになれば、その知恵と技術、資本と人材を共有でき、どれほどメリットが生まれるかを考えると非常に残念でならない。

さて、盲導犬の訓練は一般にとても難しいと思われているが、“盲導犬になるために生まれてきたような犬”と出合った場合、訓練士の仕事は訓練と言うよりも作業内容を犬に紹介しているだけのような、あっけないほど簡単なものになる。今回はニュージーランドの盲導犬訓練や合同訓練自体についてふれなかつたが、日本では盲導犬使用不可とされていた人達にも動物心理学を存分に組み入れ、盲導犬のコントロールを可能にした、ユニークなテクニックをいかか紹介できればと思う。

《インフォメーション4 研究雑誌－3：1993年3月～1993年9月》

視覚障害者をめぐる諸問題（指田忠司）リハビリテーション No.355

Pp.19-22 1993年7月

視覚障害者と人権—試験制度を中心に（藤芳衛）リハビリテーション

No.355 Pp.27-30 1993年7月

盲導犬のことご存知ですか 需要の10%にも達していません（坂井敏）リ

ハビリテーション No.355 Pp.34-37 1993年7月